

民数記を学ぶ (3)

塩野和夫

第5章 信仰共同体を支える目標 民数記13～14章

1 目標とは何か

(1) 問われる目標

イスラエルが荒野の旅を始めて間もなくのこと、神はパランに宿営していたモーセに命じられた。「人を遣わして、わたしがイスラエルの人々に与えようとしているカナンの土地を偵察させなさい」(13章2節 a)。カナンの土地の偵察を命じられたのは事前に調べておき、その後に「指示を与えよう」とされる神の意図であったと思われる。

ところが、カナンを偵察した人たちの報告を受けてイスラエルは動揺した。そして、口々に「それくらいなら、エジプトに引き返した方がまだ」(14章3節 b)、「さあ、一人の頭を立てて、エジプトへ帰ろう」(14章4節 b)と言い出した。あれだけ神の恵みをいただいてエジプトを脱出し、恵みの内に荒野を旅した人々が約束の地の報告を受けて動揺した。

問題はなぜ、イスラエルの人々が動揺したのかである。だから動揺するイスラエルに問われているのは、「何が彼らを動揺させたのか」である。彼らがエジプトから望みを持って脱出できたのは目標があったからである。共同体として荒野の旅を続けることができたのも目標を共有していたからに違いない。

ところが今、その目標が失われようとしている。目標を達成するための自信を失ってしまっている。そこに民の激しい動揺があった。

(2) 目標とは何か

そこで目標とは何なのか。なぜ目標を失うと、人々は動揺したのかを考えなければならない。

まず、目標は前方に設定される。現在から未来に向けて設定されているが、今の時と無関係ではない。目標は緊密に今と関係しているためである。現在と切り離すならば、それは目標でも何でもない。なぜなら、時間的には目標を目指して今の歩みを進めるからである。

目標には喜びがあり、そこに向けて力を注いで良かったと言える何かがある。同時に目標は現実的でなければならない。さらに一步私たちを高めるとともに、手の届かないものは目標とならない。次いで、目標に向けて歩む主体が問われる。目標を目指す者には意欲と力量が必要とされるからである。目標に意味を感じ、目標の達成に喜びを感じるならば、それが生きる意味となる。

目標への歩みに人生の意味があるとすれば、目標を失うことは人生の中身を失うことに通じる。そこに目標を失った者の動揺があった。

(3) キリスト教信仰における目標の特質

目標を目指す生き方はキリスト教信仰と密接に関わっている。そこで、キリスト教信仰における目標の特質を見ておきたい。

まず、信仰における目標は一義的に人間が設定したものではない。もちろん、私たちも自らの人生においていくつもの目標を設定する。しかし、それらの前提となる大きな目標は神から与えられた約束である。神は「天の御国」を約束として与え、「天に宝を積むこと」が生き方として示されている。だから、信仰者は「御国を来たませたまえ」と祈りつつ生活する。

信仰とは天の御国を約束として与えられた者の神への応答である。キリスト者は神の恵みに応えて生涯を送る。信仰をもって応答するところには、神と信仰者との生きいきとした交わりが生まれる。神は約束をもって語りかけ、キリスト者は喜びをもって約束に生きていく。ここに信仰者の生き方が生まれてくる。

キリスト教信仰における目標が生み出す特質の一つに共同体の成立がある。私たちは自分の足で天の御国を目指して歩んでいるが、それは御国を目指す共同体の一員としてという側面を持つ。神の約束を受け、目標を目指す歩みは一人でできるものでは

ない。神の約束は歴史を貫く共同体によって担われ実現していく。キリスト者は神のみ旨に応える共同体の一員として共同体にも仕えている。このようにして仕える人が集められ、信仰の共同体は成立する。

2 「約束の地」の偵察 民数記13～14章

(1) 偵察者の召集とモーセの指示 13章1～20節

約束の地を偵察するにあたり、偵察する者が召集された。注意すべき点がある。

まず、偵察は神の命令である。カナンの地を与えると約束された神が責任を果たすべく偵察を命じられている。次いで、12部族から1人ずつ部族の長である人々が選ばれた。その中に「ユダ族では、エフネの子カレブ」（6節 a）が、「エフライム族では、ヌンの子ホシェア」（8節）がいた。

神から命じられた事柄をモーセが忠実に偵察者たちに指示している。なお、モーセの指示では「ネゲブに上り、更に山を登って行き」（17節 b）とある。ネゲブはカナンの地の南の端に位置する。つまりモーセは南の端に位置する山々に登り、偵察してくるように指示している。それに対して偵察者は「ツインの荒野野からレボ・マハトに近いレホブまでの土地を偵察した」（21節 b）、つまりカナンの全領域に及んでいる。

このような相違は資料の違いから来ていると考えられている。

(2) 報告と動揺 13章25～33節

12人の偵察者は40日間カナンの地を偵察した後にモーセと全会衆に報告している。彼らはまず「そこは乳と蜜の流れるところでした」（27節 b）と報告する。つまり、神が約束された通り「乳と蜜の流れる素晴らしい土地」に違いはなかった。ところが、彼らは言葉を継いでいった。「しかし、その土地の住民は強く、町という町は城壁に囲まれ、大層大きく、しかもアナク人の子孫さえ見かけました」（28節）。つまり、「とても私たちが相手にできる人々ではなかった」というのである。

ただし、偵察者の見方が一致していたわけではない。カレブは「断然上って行くべきです。そこを占領しましょう。必ず勝てます」（30節 b）と進言した。神への信仰に立った進言である。

ところがカレブの発言は反感を買い、他の偵察者たちは「いや、あの民に向かって上って行くのは不可能だ。彼らは我々よりも強い」（31節 b）と反対した。さらに、

約束の地について悪いうわさが流される。なぜ、多くのリーダーは悪く言いふらしたのか。それは動揺から来ていた。さらにカレブに対する反感もあった。

いずれにしても、リーダーたちの言葉の内には神の約束がすっかり忘れられている。神の約束を忘れ、動揺から広められた噂は混乱の元となった。

(3) 民の動揺と神の怒り 14章1～12節

悪い噂を聞いた民はすっかり動揺してしまう。彼らはカナンを目指して喜びに満ちて歩んできていた。ところが、動揺のために目標を見失ってしまっていた。そこで、「さあ、一人の頭を立てて、エジプトへ帰ろう」と互いに言い始めた。それは神の約束から外れた勝手な思いの言葉だった。

そこで、ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブが共同体に対して信仰に立ち帰ることを勧めた。ところが、彼らは聞く耳を持たないばかりかヨシュアとカレブを「石で撃ち殺せ」と言い出した。

民に対して神は激しく怒られる。神は民が不信仰だと責められる。それは「神を侮り」、「すべてのしるしを無視し」、「神を信じない」ゆえである。

そこで、動揺する民を「疫病で打ち」、「彼れを捨て」ように言われる。

(4) モーセのとりなしと裁き 14章13～38節

神の怒りの前にあってモーセはイスラエルをとりなす。

モーセに敵対し、彼に従わない民であった。それでもなお、モーセはイスラエルの民の立場に立って彼らのためにとりなす。神の名誉のために神の言葉とその大きな慈しみを根拠としたとりなしであった。モーセのとりなしがイスラエルを救う。

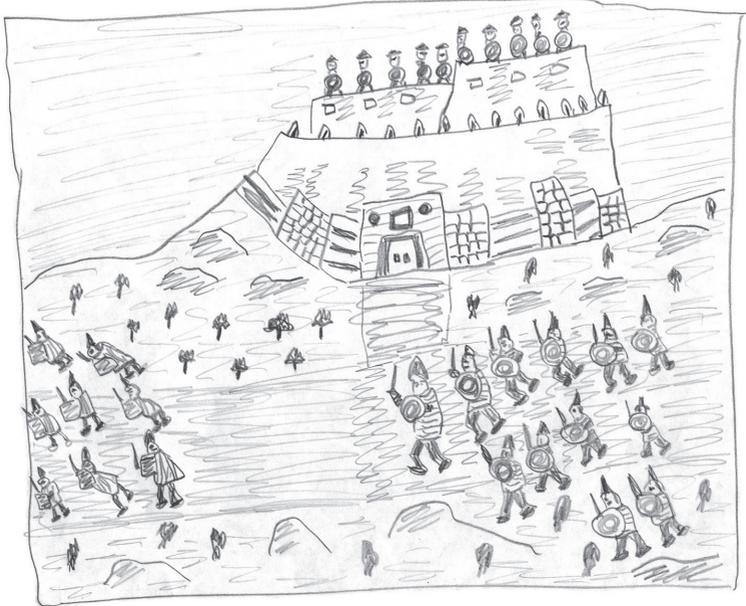
赦しと同時に不信の民に対する裁きも告げられる。

それは40年にわたって荒野を旅しなければならないこと、それにカレブとヨシュア以外は約束の地を踏むことは出来ないという裁きであった。

(5) 敗戦 14章39～45節

神の怒りと裁きを聞いた民は非常に悲しんだ。

しかし、彼らは悔い改めるのではなく、約束の地へと攻め上る。神の言葉に従ってではなく、自分勝手に攻め込んだ。



敗 戦

それは何の目標もなく、支えもない勝手な行動であった。彼らは散々に打ち破られてしまう。

3 共同体を支える目標

(1) 目標の喪失とは何であったか

テキストは目標を喪失した人々を描き出していた。彼らにとって目標の喪失とは何であったのか。

それを神は不信仰と言われる。あれほど繰り返し神の恵みを示されていたにもかかわらず、不信仰のゆえに目標を喪失したと言われる。確かに目標の喪失は不信仰から来ていた。

では、その不信仰はどこから来たのか。それは相手に目を奪われた現実からである。相手に目を奪われてしまった時に、彼らを導いてきた目標は失われていた。そして、目標から離れたところから重要な判断を下していた。

(2) なぜ、目標を失ったのか

彼らは何故目標を失ってしまったのか。

「エジプトに帰ろう」、「隷属生活に帰ろう」と叫んだ時、そこには主体がなかった。発言への責任もなく、彼らを支えてきた神の恵みに立つこともなかった。

それは主体の放棄であり、神の約束に応えてきた生き方の喪失である。そこにおいて彼らを導いてきた目標が失われている。

(3) 目標に通じるもの

喪失すると共同体が崩壊してしまう目標とは何なのか。

目標が生きていた時、彼らは神との関係を生きいきと生きていた。神は恵みを示し、民はその恵みを生きていた。そこにおいて神と民との応答関係は成立していた。目標を介して両者の関係が成り立っていたのである。

したがって、目標を失うと両者の関係までもが失われた。

(4) 信仰共同体を支える目標

信仰共同体を支える目標があった。神が与え、それによって信仰共同体は支えられて歩む目標があった。だから、目標が失われると共同体自体も崩壊していく。

その現実には現代の教会においても同様である。教会は一つの目標で結ばれ、形成される共同体である。だから、大きな目標を掲げつつ、具体的な目標を見上げて共に歩む。

目標は現代の教会においても重要な課題に違いない。

4 覚えましょう

(9) さあ、一人の頭を立てて、エジプトへ帰ろう。 民数記14章

目標を見失ったイスラエルの民は動揺する中から、隷属した生活への回帰を望んだ。それは自由も主体も信仰もない、したがって人間性のない生活であった。生きた目標を失うことにより人間はたやすく隷属した生活へと堕ちていく。

(10) もし、我々が主の御心に適うなら、主は我々をあの土地に導き入れ、あの乳と蜜の流れる土地を与えてくださるであろう。民数記14章

信仰の言葉である。カレブとヨシユアは多くの民が動揺する中であって、神への信仰と与えられた目標を持ち続けていた。神に期待する言葉は神の約束に応答していた。

第6章 指導者の条件 民数記16章

1 第3の課題

(1) 宗教的政治的指導者をめぐって

民数記11～20章は民数記の第2部になる。ここに描かれているのは40年に及ぶ荒野の旅における出来事である。約束の地に向けた長い道のりでイスラエルは共同体として整えられた。しかし同時に彼らは様々な課題に出会っている。

荒野の旅で出会った第1の課題は民のつぶやきであった。誰かが不平をつぶやくと、それはイスラエル中に広がった。彼らは不平不満を抱きながら、モーセに詰め寄った。第2の課題は神の約束への失望がもたらした危機である。各部族の代表が偵察し失望すると、それは民に広がった。荒野における目標の喪失はイスラエルの基盤を揺り動かす危機となった。

次いで、第3の課題が起こってきた。これはすでに12章でもミリアムとアロンの反抗として記されていた。それが16章ではさらに大掛かりに明確な目的を持ち、有力者が手を組んで反抗した。すなわち、モーセとアロンに対する宗教的政治的指導権をめぐる争いである。彼らはイスラエルの有力者であり、「なぜ、モーセとアロンだけが人々の上に立つのか」と主張した。

しかも、民の多くは心情的に反抗者を支持した。そのために、モーセとアロンは孤立し、彼らの指導者としての根拠が問われた。

(2) 聖書における指導者

聖書における指導者とはどのような存在か。指導者には大別して、宗教的・政治的・教育的指導者がいた。

宗教的指導者は祭司とレビ人に代表されるが、神とイスラエルの間に立って祭儀の責任を負い、人々のとりなしをした。政治的指導者を代表するのは王であるが、イスラエルには「主こそ王である」という一貫した信仰があった。そこで王は神から立てられ民を治める権威を授けられると同時に、神に対しては人々を代表する立場にいた。イスラエルにおける教育は信仰の継承を基本とした。そこで、家庭における父と母が誰よりもまず教育的指導者であった。両親は家族を神への信仰へと導き、尊敬された。預言者についても同様のことが言える。彼らの主たる使命はイスラエルの民を神へと立ち帰らせることにあった。そのために預言者は真実を込めて民に語り続けた。

ところが、聖書は預言者と共に偽預言者の存在を語っている。偽預言者とは誰であり、彼らは何を語ったのか。偽預言者は人々に心地良い言葉を語った。彼らの言葉はなめらかでイスラエルに広く受け入れられた。しかし、彼らは偽預言者であって、預言者ではなかった。彼らは神に立てられたのでもなく、神の心に適う言葉を語っていたのでもない。神に立てられた預言者の使命は何よりも神の言葉を語ることにあった。神の言葉はしばしば厳しく、特に神から離れた人々に対しては悔い改めを迫った。だから、預言者は必ずしも人々から受け入れられたわけではない。それでも、聖書は神にある真実を語り警告した人々を預言者としている。

(3) 指導者の根拠

聖書における指導者の根拠とは何なのか。どのような民族であっても共同体である限りリーダーが必要である。しかし、何がその人を指導者とするのか。

聖書における指導者の根拠は神の召しである。神が指導者として召し、用いられる。そのしるしが油の注ぎや霊の注ぎ、あるいは職務に就く式典であった。それらのしるしによって神の召しを確信すると、人は指導者となった。

しかし、神の召しを受ければそれで十分かというところではない。神への従順が重要である。「私が」ではなく「神の召し」を根拠とするから、神への従順が指導者にはいつも求められた。職業という言葉がドイツ語や英語では神の召しと同じであることは意味深い。どのような仕事であっても、「自分が選んだ」だけでは職業とならない。仕事において「神の召し」に応じていく時、それが職業となる。与えられた仕事と生活に神の召しを見いだし、信仰をもって日常の営みをなしていきたい。

2 イスラエルの指導をめぐる 民数記16章～17章15節

(1) 反逆者 16章1～3節

本論に入る。

レビの子ケハトの孫であるコラはレビ人であり、モーセやアロンの従兄弟になる(出エジプト記6章16～21節)。彼はおそらくモーセやアロンと同様に指導者になる資格があると思っていた。ルベンの孫ダタンとアビラムはイスラエル12部族の長男の家系であり、政治的指導者の権威があると考えていて不思議ではない。ペレトの子オンについては系図が分からない。彼らに加わったのが、「集会の召集者である共同体の指導者、250名の名のあるイスラエルの人々」(2節 a)である。

彼らは誰よりもモーセとアロンに協力すべきであった。そうであるにもかかわらず逆らってこう言った。「あなたたちは分を越えている。共同体全体、彼ら全員が聖なる者であって、主がその中におられるのに、なぜ、あなたたちは主の会衆の上に立とうとするのか」(3節 b)。

彼らの主張のポイントは2点ある。第1は全会衆が聖であり、主がその中におられる。だから、主が共におられる人々の上に立つ人などいない。第2にそうであるのにモーセとアロンは主の会衆の上に立とうとして分を越えている。

(2) 分を越える 4～15節

モーセはコラと反抗するレビ人に応えている(4～11節)。モーセの返答からすると、コラたちはレビ人の務めに満足せずアロンに代わって祭司になりたかった。「その上、あなたたちは祭司職をも要求するのか」(10節 b)とある通りである。彼らはレビ人である。だから、彼らも会衆から分離されて主に仕えさせられていた。すでに選ばれ分かれた特別な務めについていた者たちである。ところが、そのレビ人がモーセとアロンに反抗した。彼らも指導者の立場にあったからかもしれない。自ら指導者の働きを知って、さらにその上を求めたと考えられる。モーセはそんな彼らに言った。「アロンを何とあって、彼に対して不平を言うのか」(11節 b)。

コラたちが祭司職を望んだのに対して、ダタンとアビラムは民の指導を求めた。モーセは人をやってダタンとアビラムを呼ばせた。しかし、彼らはモーセの命令に応えなかった。12～14節に記されている彼らの主張は3点にまとめることができる。第1にモーセは豊かな地から荒野に導き、私たちを殺そうとしている。第2にその上

モーセたちは君臨しようとしている。さらに第3として豊かな地に導こうともしない。したがって、モーセは指導者として責任を果たしていない。

(3) 神の裁き 16～35節

場面はコラたちに戻る。モーセとアロン、コラたちは神の裁きを受けるために高炉を持ち、その中に香を入れて臨在の幕屋の前にいた。その時、モーセとアロンは彼らと共に立っていた。ところが、コラは共同体全員を味方につけ、モーセとアロンに敵対させようとした。民もコラの指導に従っている。主はモーセとアロンは逆らうコラと彼に従う民を見られた。

主はモーセとアロンに共同体から分かれて立つように勧め、「わたしは直ちに彼らを滅ぼす」(21節 b) と語られた。それに対してモーセとアロンはひれ伏して、共同体に対するとりなしの祈りを捧げている。

神の権威に立つモーセとアロンに逆らったコラ・ダタン・アビラムは神の裁きを受けた。彼らは臨在の幕屋の前に立っていた。すると地が口を開いて彼らを飲みこんだ。彼らは生きたまま飲み込まれていった。また火が主の元から出てモーセに背いたレビ人250人も焼き尽くされた。ただ、彼らに味方した民に対してはモーセの祈りを聞き救われる。

このようにして厳しい裁きがコラたちに加えられた。

(4) 警告のしるし 17章 1～15節

コラたちに対する悲惨な裁きの後にモーセは主の命令を受ける。命令は2度と過ちを犯さないように下された。モーセは250人を焼き尽くした焼け跡から香炉を取り出し、それを打ち伸ばして板金とし、祭壇の覆いとした。それは警告のしるしとなり、恐ろしい裁きの記念として再び主の前に罪を犯すことがないための教訓であった。

悲惨な裁きからモーセが学んでいたのに対して、イスラエルの共同体はモーセとアロンに逆らって、「あなたたちは主の民を殺してしまったではないか」(6節 b) と不平を言った。民の不平は正当だろうか。彼らに対する神の裁きはモーセたちの責任だろうか。聖書はそうではないと明確に語っている。モーセたちを押しつけ、分を越えて祭司となり指導者となろうとしたコラたちに責任はあった。だから、思い上がりと



「モーセとアロンに詰め寄る」

イスラエルを混乱させた罪を問われて、彼らは生きたまま黄泉の世界へと落とされていった。

しかし、民は信仰の目をもって見なかった。そして、裁かれた者たちの立場に立ってモーセに不平を言った。ここに民の愚かさがある。見るべきものを見ないでつぶやく民の愚かさがある。神は再び疫病によって民を罰せられる。モーセは民のためにとりなしを祈り、アロンが香を焚いて罪を贖う儀式を行った。こうして災害は終息した。

3 指導者の条件

(1) なぜ、権威か

荒野の旅で深刻な問題を起こしたのはイスラエルの宗教的・政治的有力者であった。

彼ら自身すでに神から権威を与えられていた。そうであるのに、彼らはさらに権威を求めた。神から授けられた権威に従って職務を果たそうとするのではなく、さらに

上位の権威を求めた。その時に深刻な問題が発生した。

権威とはそのような誘惑に満ちていた。

(2) 権威への罪

「自分たちだってモーセやアロンのように宗教的政治的指導者になれるに違いない」ともくろんだ時に、彼らは大きな過ちを犯していた。それはまさに彼らの罪であった。なぜなら、モーセやアロンの権威は自分から求めたものではない。そうではなく、神が与えられた権威であった。

だから、モーセたちの権威への非難は神への非難であり、罪であった。

(3) 民の愚かさ

民の愚かさがもう一つの問題である。

民はコラたちの誘いに安易に加わった。長年にわたり彼らの指導者であったモーセの側ではなく、誘いをかけたコラたちの側に立った。その上、モーセのとりなしの祈りに感謝することもなく、つぶやいた。

民の愚かさはどこから来ているかが問題である。それは神への信仰から離れ、人の思いや言葉に関心を向けたところから来ている。

(4) 指導者の条件

指導者の条件について学ばなければならない。

神が指導者を選び、任務に就かせられる。人はただ神が与えて下さった職務に信仰をもって答えればそれでよい。

感謝を忘れ分を越えていないか、テキストは注意を喚起している。

4 覚えましょう

11 集会の召集者である共同体の指導者、250名の名のあるイスラエルの人々を仲間に取り入れ、モーセに反逆した。 民数記16章

モーセに反逆したのがイスラエルの有力者であった事実は極めて重い。だからこそ、混乱もひどかった。有力者たちはなぜ、モーセに逆らってまでさらに権威を

求めたのか。しかし、権威は神から与えられるものであるために、彼らの要求は罪となった。

12 アロンの杖が芽を吹き、つぼみを付け、花を咲かせ、アーモンドの実を結んでいた。 民数記17章

12本並べられた杖の中で、アロンの杖が芽を吹き、つぼみを付け、花を咲かせ、アーモンドの実を結んでいた。この事実は神の権威が何であるのかを語っている。神が選び用いられる指導者によって、花が実を結ぶように出来事は成就していくのである。